

コロナの時代の未来像

全国レベルの緊急事態宣言が解除されて1か月がたち、ようやく私たちのまわりの経済活動も再開され始めました。思い返せば、この3か月ほどのあいだに、私たちはいろいろな経験をし、狭い経験のなかでの判断や思い込みが、いかに当てにならないものであるかを思い知らされたように感じます。

私どもの事務所が、テレワークに着手したのが、緊急事態宣言が発令される2日前でした。しかし、この時には監査担当者が交代で在宅勤務の試験運用を行い、各人がその経験を持ち寄って、「事務所スタッフやその家族が感染した場合、いつでも在宅勤務に切り替えられる態勢」を構築することが目的でした。

4月9日に緊急事態宣言が発令され、その翌週に監査担当者全員がテレワークに突入するとは、そのとき想像もしていなかったのです。4月初めに財務データをクラウドに移行し、相当のスピード感と金銭的負担感をもって、ことに当たっていたにもかかわらず、いまから振り返ると、初期の認識は牧歌的なものであったと言わざるを得ません。

先日の日経新聞の報道では、全国の34.7%がテレワークを経験し、東京23区では55.5%が経験したとのこと。注目すべきは、この東京23区の55.5%のうち9割がテレワークを継続して利用したいと答えていることです。感染がおさまリ、やがてワクチンも開発されて、社会、仕事も生活もすべてが元の通りに戻っていくというのは、現実的な未来像ではないようです。ウィズ・コロナの時代は、ずっと古い思い込みを裏切っていくのでしょうか。

■ 『デカメロン』の補助線

『アフターコロナ 見えてきた7つのメガトレンド』（日経BP）は、各業界著名人へのインタビューを交えているので、やや雑駁な印象を受けはしますが、プロローグとエピローグに明確な編集意図が語られていて、読み応えのある本にまとまっています。

本書は『デカメロン』の紹介から始まります。14世紀中ごろ、ヨーロッパを席卷するペストの難を逃れようと、フィレンツェ郊外の別荘に集まった男女の物語、デカメロンのヨーロッパ社会に与えた影響は相当に大きなものでした、そこで、未来社会を読み解くための「補助線」が、この物語から導き出されるのでは、というのです。

「ペスト禍でふさぎ込んでいてもしょうがない」と、10人がそれぞれ好き勝手に作り上げた物語を1日に1話ずつ語っていくのですが、この作品は全体に妙に明るい雰囲気を出しています。ボッティチェリがこの物語に着想を得て「ビーナスの誕生」を描いたように、デカメロンはルネサンスのうねりへとつながっています。

本書の編集部は、アフターコロナの補助線のひとつを「人間への回帰」としています。

さらに、デカメロンが「物語のなかの物語」という「規制」を設けることで、市井の人々が自分の言葉でストーリーを紡ぐこと（近代小説）を可能にしました。そこで、アフターコロナのもうひとつの補助線として「規制が生み出す新しい価値」が掲げられています。

本書では、アフターコロナの7つのメガトレンドを具体的に掲げています。

「分散型都市」「ヒューマントレーサビリティ」「ニューリアリティ」「職住融合」「コンタクトレステック」「デジタルレンディング」「フルーガルイノベーション」がそれです。ここでは、前述の2つの補助線から比較的説明のしやすい「分散型都市」「職住融合」と「フルーガルイノベーション」について触れてみたいと思います。

■ 「分散型都市」と「職住融合」

グーグルはそのテクノロジーを最大限に活用したスマートシティーをトロント市で開発する予定でしたが、この事業からの撤退を表明しました。パンデミックで、都市機能の集中がいかに危険であるかを思い知らされたからです。代わって登場したのが「分散型都市」という考え方です。トヨタ自動車は静岡県裾野市に計画するウーブン・シティ構想がそのうちのひとつです。

「分散型都市」では、そのコンパクトさを活用すべく、テクノロジーを駆使して、移動手段やエネルギー源を進化させていきます。分断リスクへの備えのために都市間の相互接続性を確保すると同時に、食べ物の「地産地消」も進めていく計画なのだそうです。

一方、「職住融合」はテレワークの普及から生まれてきた考え方です。建築家の隈研吾氏は20世紀の街づくりを「大箱都市」と表現しています。オフィスや工場などの「大箱」を造って、そこに人を集めることで効率化を図ってきましたが、これからは「逆大箱化」が加速するだろうということです。「働く空間」と「衣食住の空間」が明確に分離されるのではなく、住宅で仕事ができるのみならず、街のあちらこちらに「分散」してオフィス機能が存在するような考え方です。

「分散」というキーワードは「分散型都市」とつながります。「大箱」に閉じ込められるのではない「人間」サイズの働き方、暮らし方は、「人間への回帰」にもつながります。

■ フルーガル・イノベーション

「フルーガル（儉約）イノベーション」は、テクノロジーの進化がイノベーションをもたらすという旧来の考え方を覆します。ひっ迫する医療分野などで、従来のサービスや製品を基に、現場のニーズに合った安価で高性能な製品を再設計するようなイノベーションです。人工呼吸器としての最低限の機能だけを残し、3Dプリンターで大量生産できるような技術が実際に動き出しています。コロナ禍のもたらす最も大きな規制は「景気の後退」です。不景気下で大資本にイノベーションを生み出す余力がない時代には、のびきならないニーズから、思いもよらないイノベーションが立ち現れる余地が生まれます。

本書に描かれた未来像は、明るすぎる印象を与えるかもしれません。しかし、デカメロンが描かれた背景である「こんなときにふさぎ込んでいてもしょうがない」という開き直りの精神は、この時期だからこそ欠かせないと思うのです。 (所長 瀬戸 英晴)